

# 上田市池波正太郎真田太平記館の紹介

## 池波正太郎真田太平記館

### はじめに

上田市は、長野県東部の中核都市で、緑溢れる森林・里山と清らかな水の流れる川に育まれた自然豊かな地域です。「ひと笑顔あふれ 輝く未来につながる健幸都市」をキャッチフレーズに、「市民が主役のまちづくり」、「安全・安心な快適環境のまちづくり」、「誰もがいきいき働き産業が育つまちづくり」、「ともに支え合い健やかに暮らせるまちづくり」、「生涯を通じて学び豊かな心を育むまちづくり」、「文化を育み、交流と連携で風格漂う魅力あるまちづくり」を目指しています。

また、日本のほぼ中央に位置している上田市は、北は長野市、千曲市、須坂市、坂城町、筑北村、西は松本市、青木村、東は嬭恋村(群馬県)、東御市、南は長和町、立科町と接しています。

奈良時代から、京都と東北地方を結ぶ「東山道」の拠点として栄え、交通の要衝でしたが、現在はJR北陸新幹線、しなの鉄道、上田電鉄別所線が上田駅で接続し、上信越自動車道(上田菅平インターチェンジ)を有しています。

北は上信越高原国立公園の菅平高原、南は八ヶ岳中信高原国立公園に指定されている美ヶ原高原などの2,000メートル級の山々に囲まれています。佐久盆地から流れ込む千曲川(新潟県からは「信濃川」)が市の中央部を東西に通過、これに周囲の山々を源流とする依田川、神川、浦野川等が合流し、長野盆地へと流れていきます。標高400メートルから800メートルの河川沿いに広がる平坦地や丘陵地帯に市街地及び集落が形成されています。

上田市真田地域(旧真田町)は、真田氏発祥の郷とされ、今も史跡が多く残っています。上田地域と上州(今の群馬県)を支配していた真田家は、織田、徳川、北条などに囲まれながら、戦国大名としての地位を確立していきます。戦国時代、真田昌幸が上田城を築城し、徳川の大軍を2度も退けたことは有名です。(第一次・第二次上田合戦)

関ヶ原合戦で真田父子は、豊臣方と徳川方に分かれて戦うこととなり、豊臣方についた真田昌幸と真田幸村(信繁)は紀州(和歌山県)九度山に流されてしまいます。昌幸は九度山で生涯を終えますが、幸村(信繁)は、大坂の陣で豊臣方について戦います。その際の戦いぶりは凄まじく、あと一歩のところまで徳川家康に迫りますが、討ち取れず戦死します。

徳川についた真田信之(信幸)は、「関ヶ原合戦」「大坂の陣」の後も徳川への忠誠を貫き、家康の信頼が厚かったそうです。徳川家康が天下統一を果たした後、上田城主として上田を治め、1622(元和8)年に松代へ移封されるまで、国づくりに尽力しました。

上田市の西南に広がる塩田平エリアは、田園風景が広がる風光明媚な地にあり、西端には信州最古ともいわれる「別所温泉」が湧出しています。この付近は古くから仏教文化が花開き、鎌倉時代から室町時代にかけて造られた国宝や重要文化財、県宝などが数多く点在していることから「信州の鎌倉」とも呼ばれ、2020(令和2)年、文化庁の「日本遺産」に認定されました。中部日本で最古の木造建築物、国宝・八角三重の塔、希少な石造多宝塔など、当時の面影をとどめた歴史ある

寺社や史跡は、「信州の学海」とまで評され、どれもひと目見る価値があります。

また、塩田平は、独鈷山と夫神岳から扇状に開ける穀倉地帯でありながら、日本有数の少雨地帯として水の確保に悩まされてきました。

先人たちは、わずかな雨水も無駄にすまいと百余のため池をつくり、ため池を守るために人柱を捧げたこともありました。ときには路傍の地蔵をため池に投げ込んだり、大松明を灯して祈りを捧げたりと、さまざまな形で龍神に雨を乞い願ったのです。雨の恵み、太陽の恵みを神仏、ことに龍に祈る信仰は、今も脈々と残されています。

山のふもとにある信州最古の温泉といわれる「別所温泉」、「国土・大地」を御神体とする「生島足島神社」、<sup>いくしまたるしま</sup>「大日如来・太陽」を安置する「信濃国分寺」は、1本の直線状に配置され、レイラインをつないでいます。夏至と冬至に、鳥居の中を太陽の光が通り抜け、神々しくぬくもりのある輝きを享受できる場所でもあります。

## 池波正太郎と上田

池波正太郎が初めて書いた時代小説は『真田騒動〜恩田木工』であり、真田氏を題材にした作品です。劇作の師である長谷川伸の書庫で手にした『松代町史』の中で真田信之（信幸）に興味を持ち、それから真田氏を題材にした作品を多く執筆しました。その中で『錯乱』は、第43回直木賞を受賞しています。真田氏関連の作品の集大成ともいえるのが、『真田太平記』で、『週刊朝日』に1974（昭和49）年からおよそ9年間連載された大長編小説です。

池波正太郎は風土や季節ごとの感覚を特に大事にした作家であり、『真田太平記』の執筆にあたり、取材のためしばしば上田へ足を運んでいます。

池波正太郎が、初めて上田を訪れたのは、1965（昭和40）年1月にテレビ番組で「上田・別所」の探訪ゲストに招かれたときでした。季節は冬、3日間にわたり上田に滞留し、雪の降る信濃国分寺や上田城址を訪ね、その番組で知り合った人々との友誼は続き、連載している『真田太平記』の取材によって親交が深まりました。



外観

池波正太郎は、時代小説だけでなく、エッセイでもしばしば上田のことを書いています。

上田の印象については、「折にふれ、上田の人々の顔をおもい、上田の町をおもうことは、私の幸福なのである」と述べています。

## 上田市池波正太郎真田太平記館開館

上田市では、池波正太郎がエッセイでも述べている上田への思いと時代小説『真田太平記』の深い縁を末永く大切にしたいと考え、池波家をはじめ多くの皆様にご協力をいただきながら、1998（平成10）年11月23日に「池波正太郎真田太平記館」を開館いたしました。この年は、長野冬季オリンピックで年が明け、前年には長野新幹線、上信越自動車道が開通し、上田は首都圏からも短時間で気軽にお越しいただける場所となりました。

当館では、作家の池波正太郎の功績と顕彰、上田市が重要な舞台となっている『真田太平記』を中心に池波文学の一端を紹介する文学館であり、併せ



常設展示室



て上田市の中心市街地の回遊拠点施設として、地元商店会等と連携した事業も実施しています。

## 館内紹介

### ◆常設展示室（本館２階）

- ・池波正太郎コーナー  
直木賞受賞『錯乱』等の限定本、パイプや万年筆等の遺愛品、自筆原稿等を展示
- ・真田太平記コーナー  
取材ノート、真田太平記年表等を展示  
映像コーナー「真田太平記散策」、「大坂冬の陣・夏の陣」

### ◆ギャラリー（蔵）

『週刊朝日』連載時に使用された『真田太平記』挿絵（画・風間完）を展示  
風間完氏は、1919（大正8）年、東京・京橋で生まれた洋画家・挿絵画家で、挿絵画界の第一人者

### ◆シアター（蔵）（映像４作品を上映）

- ・切り絵で再現する「上田攻め」（17分）
- ・池波氏のエッセイでつづる「城下町上田」（13分）
- ・「真田太平記の世界」（35分）
- ・「真田幸村・大坂の陣」（25分）

### ◆忍忍洞

『真田太平記』に登場する真田忍者「草の者」の生活や任務を、楽しい「からくり紙芝居」で紹介しています。

### ◆喫茶「ル・パスタン」（交流サロン）

飲み物と軽食の提供  
池波正太郎の書籍販売  
上田の土産品及びグッズ販売

### ◆企画展示室（多目的ホール）

館主催事業として、年３回の企画展を開催



ギャラリー



シアター



忍忍洞

## 主催事業紹介

○年３回の企画展（春、夏、冬）を開催

池波正太郎や池波作品に関するもの、『真田太平記』に関するもの、上田に関わるもの等

## ○文化事業

- ・文学散歩（年1回程度）

池波作品の舞台である地を訪ね、史跡見学等を実施、作品をより深く楽しんでもらうことを目的とする

- ・特別講座（サロントーク）

池波正太郎や作品の世界についての講座

## 池波正太郎略歴

- 1923（大正12）年、東京・浅草聖天町に生まれる。
- 1943（昭和18）年、20歳で『婦人画報』（東京社）朗読文学作品募集に応募し、入選する。
- 1946（昭和21）年、23歳で下谷区役所（現台東区）に勤務しながら戯曲を書き始め、25歳で長谷川伸に師事、本格的に劇作の指導を受け、後、「鈍牛」「檻の中」などが新国劇で上演された。
- 1954（昭和29）年、長谷川伸の勧めもあり、小説を発表し始める。
- 1960（昭和35）年、『錯乱』で直木賞を受賞（第43回・昭和35年度上半期）する。
- 1968（昭和43）年、『鬼平犯科帳』が連載開始となる。
- 1972（昭和47）年、『剣客商売』『仕掛人・藤枝梅安』が連載開始となる。
- 1974（昭和49）年、『真田太平記』が連載開始となる。
- 1977（昭和52）年、吉川英治文学賞を受賞する。
- 1988（昭和63）年、「大衆文学の真髄である新しいヒーローを創出し、現代の男の生き方を時代小説の中に活写、読者の圧倒的支持を得た」とされ、菊池寛賞を受賞する。
- 1990（平成2）年5月3日、急性白血病で死去（享年67歳）。

現在の台東区の下町で生まれ育った池波氏は、下町のひとびとを代表するような、親しみのある物の見方で、小説やエッセイを執筆しました。特に日本の戦国時代から江戸時代の時代小説等の作品を多く書いた作家とされています。

その代表作として『真田太平記』『鬼平犯科帳』『剣客商売』『仕掛人・藤枝梅安』などがあります。

## 『真田太平記』とは

『真田太平記』は、1974（昭和49）年から1983（昭和57）年まで、9年間にわたり『週刊朝日』（朝日新聞社）に連載され、信州・上州にまたがる小さな領国を守る真田家の興亡を主軸に、戦国末期の様相が、雄大なタッチで描写された長編大河小説です。

物語は1582（天正10）年～1622（元和8）年の40年間に起こった歴史的な出来事が舞台で、登場人物は真田家の当主で、まれに見る戦上手として異彩を放った真田昌幸、その父の遺志を継ぎ戦将として華々しく散っていった二男・幸村（信繁）、父弟とは相反する道を敢えて選び、真田家を守り抜いた長男・信之（信幸）。それぞれの生きざまが、あますところなく描かれています。そして父子とともに活躍する草の者たちの壮絶な闘い、さらに関ヶ原、大坂冬・夏の陣の模様や、戦いに臨んだ武将たちの姿が生き生きと、そして克明に語られています。戦国という、もっとも揺れ動いた時代の壮大なドラマであり、池波作品の原点とも言える〔真田もの〕、その後に人気作となった〔忍者もの〕の集大成と言える作品になっています。

連載時の挿絵は、洋画家・挿絵画家の第一人者である風間完が戦国時代の緊張感あふれる情景と、魅力的な登場人物を丁寧に描いています。

また、1985（昭和60）年には、NHK新大型時代劇「真田太平記」全45話が放映されました。真田昌幸を丹波哲郎、真田信之（信幸）を渡瀬恒彦、真田幸村（信繁）を草刈正雄が演じた作品は、多くの人々から好評を得ました。



## 『真田太平記』の舞台

### ◆上田城

真田昌幸が築城した上田城は千曲川の断崖・尼ヶ淵に築かれ、天正13年（1585年）に完成したと考えられています。

この上田城で、真田氏は二度にわたり徳川の軍勢に攻撃されます。最初は真田の領地沼田をめぐる戦いで、大軍の徳川勢を追い返しました。二度目は西上する徳川秀忠軍をこの城で足止めし、天下分け目の関ヶ原戦に遅らせました。

この二度にわたる戦い（上田合戦）で、真田氏は、その戦略と勇猛果敢な戦いぶりで、天下に『真田』の名を知らしめました。

関ヶ原合戦後、上田城は豊臣に与した真田昌幸の城として破却され、徳川方の武将となっていた昌幸の嫡男・信之が上田の地を領有しました。

城郭は破却されたものの、信之は別に藩主屋敷を建て、藩政を行いました。

元和8年（1622年）真田氏は松代へ移封となり、現在の上田城は、真田氏の後に上田に入封した仙石忠政が城郭を再建したものです。仙石氏は真田の城をほぼそのまま築いたとされています。

上田城址内にある石井戸（真田井戸）は、北方の太郎山への抜け道になって通じていたという伝説があります。

### ◆別所の湯

上田市の西方に開けた塩田平は、中世の信州における文化の中心地で、鎌倉後期には寺々が学問所として開かれ、全国から僧たちが集まりました。

別所温泉は夫神岳・女神岳の間を流れる湯川沿いに広がる、小さな山の温泉地で、この中の常楽寺・安楽寺も学問所として開かれていました。池波正太郎は『真田太平記』にその重厚な寺や国宝三重塔などを登場させています。物語の中で真田幸村（信繁）が度々湯浴みに訪れ、女忍び・お江と出会い、高遠城の戦いでの傷を癒した佐平次とも、この温泉で出会います。

そんな縁で、別所温泉「石湯」の前には池波正太郎揮毫の石碑「真田幸村公隠しの湯」が建てられています。



揮毫の石碑（別所温泉「石湯」）

### ◆真田屋敷跡

真田氏本城から真田の郷を遠望すると集落の中に真田氏の居館跡が見えます。この場所を地元では「お屋敷」と呼んでいます。

中世の真田氏の館跡で、周辺に本城・天白城・松尾古城・根小屋敷・砥石城と山城と砦が点在し、その中心がお屋敷です。

北側は川、周辺は土居で囲まれている中世の館跡ですが、段郭周囲は下部が石積み、上部は土盛りの土居で囲まれ、大手口には石積みの枳形があります。

### ◆信濃国分寺

741（天平13）年、聖武天皇の詔「国泰らかに人樂しみ、災いを除き福至る」により、七重塔のある、金光明経・法華経を納めた「国の華」ともいべき寺院「信濃国分寺」（金光明四天王護国之寺、法華滅罪之寺）がこの地に建立されました。発掘調査で当時の伽藍配置や規模が明らかになり、この寺が比較的早い時期に完成したと考えられています。

『真田太平記』で、関ヶ原合戦後、敵対することになった兄・信之（信幸）と弟・幸村（信繁）の別れのシーンに信濃国分寺が登場します。この場面に、池波は雪を降らせています。これは、池

波自身が信濃国分寺の取材時に雪が降ったことによるとされています。

## 池波正太郎記念文庫

池波正太郎は、上野・浅草を故郷とし、江戸の下町を舞台とした時代小説の傑作を多数発表しました。氏の業績や作品の世界を広く伝えるため、2001（平成13）年9月26日、台東区立中央図書館内に「池波正太郎記念文庫」が開設されました。

池波正太郎作品に関するさまざまな資料を収蔵し、書斎の復元や著作本・自筆原稿・絵画等を展示しています。また、時代小説コーナーでは、戦前の貴重本から現代の人気作品まで幅広く資料を収集し公開しています。

2006（平成18）年に当館は台東区池波正太郎記念文庫と姉妹館提携を結んでいただいたことから、連携事業の開催が可能となり、両館を訪れる方も多くみられるようになりました。

2026（令和8）年は、姉妹館提携20周年の節目の年であるため、「池波正太郎記念文庫」で所蔵している貴重資料（自筆絵画、自筆原稿等）をお借りして、当館では特別企画展を開催する予定です。池波正太郎記念文庫は、現在、改装中のため休館となっておりますが、2026（令和8）年12月には再開を予定しています。

## おわりに

以上、池波正太郎真田太平記館のご紹介をいたしました。池波ファンのみならず、ぜひ当館に足をお運びいただき、池波正太郎の人となりや『真田太平記』の面白さを感じていただければ幸いです。併せて、上田城跡をはじめとする趣のある場所を散策いただきながら、上田の歴史を広く感じてください。

## 池波正太郎記念文庫基本情報

〒111-8621 東京都台東区西浅草3-25-16

台東区生涯学習センター 台東区立中央図書館内

開館時間 月～土 午前9時～午後8時

日・祝日 午前9時～午後5時

休館日 第3木曜日、年末年始、特別整理期間  
（臨時休館する場合あり）

※2026（令和8）年11月末（予定）まで休館

## 池波正太郎真田太平記館 基本情報

〒386-0012 長野県上田市中央3-7-3

TEL 0268-28-7100 FAX 0268-28-7101

開館時間 午前10時～午後6時

（入館は午後5時30分まで）

休館日 毎週水曜日・祝祭日の翌日・年末年始  
（その他振替休館日あり）

観覧料 一般 400（330）円

高・大学生 260（200）円

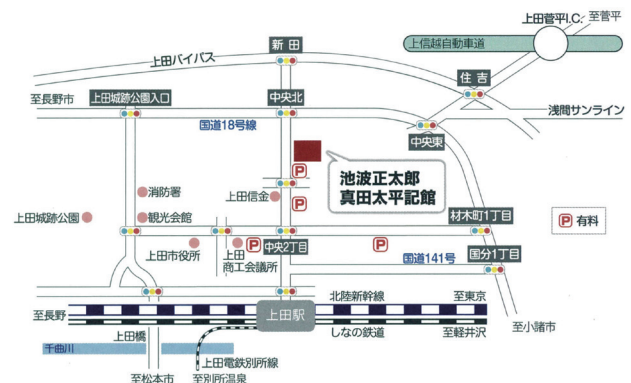
小・中学生 130（100）円

※（ ）は20人以上の団体料金、障害者手帳割引あり

アクセス 北陸新幹線上田駅、信濃鉄道上田駅から徒歩10分

上信越自動車道 上田菅平ICから車で約10分

駐車場 当館に駐車場はありません。近隣の有料駐車場をご利用ください。



## 【出典】

上田市公式ホームページ

池波正太郎真田太平記館パンフレット

池波正太郎真田太平記館図録